



あいち防災キャラクター
防災ナマズン

あいち 防災通信

第11号

●発行●
愛知県・あいち防災
協働社会推進協議会



阪神・淡路大震災から20年

～いま、私たちに出来ること～

写真(神戸市役所提供)

阪神・淡路大震災とは

平成7年1月17日5時46分、淡路島北部の北緯34度36分、東経135度02分、深さ16kmを震源とするマグニチュード7.3の地震が発生しました。この地震によって、神戸と洲本(兵庫県)で震度6を観測したほか、豊岡(兵庫県)、彦根(滋賀県)、京都で震度5、大阪、姫路、和歌山などで震度4を観測し、東北から九州にかけて広い範囲で有感となりました。また、この地震の発生直後に行った被害状況の調査の結果、神戸市の一部の地域等において震度7であったことがわかりました。

この災害による人的被害は、死者6,434名、行方不明者3名、負傷者43,792名という極めて深刻な被害をもたらしました(消防庁調べ、平成17年12月22日現在)。

この地震は、内陸で発生した、いわゆる直下型地震であり、破壊した断層付近で非常に大きな揺れを生じ、神戸市を中心とした阪神地域および淡路島北部で甚大な被害を受け、多数の住民が避難所での生活を余儀なくされました。

また古い木造住宅の密集した地域において、地震による大規模な倒壊、火災が発生し、特に、神戸市兵庫区、長田区などでは大火災が多発しました。

気象庁はこの地震を、「平成7年(1995年)兵庫県南部地震」と命名しましたが、政府は、災害の規模が特に大きいことに加え、復旧・復興施策を推進する上で統一した名称が必要となると考えられたことから、災害名を「阪神・淡路大震災」と呼称することを平成7年2月14日に閣議口頭了解しました。

参考:内閣府防災情報のページ 阪神・淡路大震災教訓情報資料集 阪神・淡路大震災の概要 (http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/hanshin_awaji/earthquake/)

阪神・淡路大震災は「災害は、突然やってくる」という事実を突き付けた。私たちは、事前に準備していないことと、とっさに対応できない。だから、必要最低限の知識と備えはちゃんと行う。自分の家の周りのリスクや、避難所確保は知っておく。いざというときのための水や食料を確保する。地震が起こったら、すぐにドアを開けて外に出られるようにする。靴は下駄箱に片付けず、すぐはけるようにする。水に困らないように湯船にお湯をためておく。どれも難しいことではない。日常生活の中でできることを積み重ねていくことが大切である。

その一方で、時間は着実に過ぎていく。今の神戸の小、中、高校生は、阪神・淡路大震災後に生まれた世代だ。自分自身の体験として阪神・淡路大震災を知らない。でも、日本全国のどこかの小、中、高校生よりも震災に詳しい。これは、震災から学びを得る「震災学習」を積み重ねてきた成果である。震災が伝えたものは、災害の怖さ、つらさだけではない。命の大切さ、地域とのつながりなどもある。震災のさまざまな側面を、ボランティア活動、ハザードマップ作り、避難所支援体験などを通して学んでいる。この震災学習を支えるうえで重要なのが教員の取り組みである。震災から5年を迎えた平成13年に、阪神・淡路大震災時に対応した経験を持つ小、中、高等学校、盲学校、養護学校教員約100名から構成される「震災・学校支援チーム」が設置された。震災・学校支援チームのメンバーは、研修を開催し自らの知見を高めるとともに、県内の防災教育の質の改善、他の地域で発生した災害の支援を行っている。防災に携わる幅広い人的ネットワークと、人材育成が行われていることが持続的な震災学習の基盤となっている。

阪神・淡路大震災が起こった時、私は神戸大学の学生だった。偶然海外にいたので、私自身は無事だった。ただ、家族のこと、友達のこと、学校のこと、何もかもが心配だった。午前5時46分。早朝に突然起こった地震で、美しかった港町神戸は一変した。北野の異人館は倒壊し、三宮の生田神社も社殿が倒壊、屋根だけ残った。住んでいた六甲道の駅も倒壊。商店街は焼けてしまい、神戸に戻ったときは、あまりに変わった街並みに茫然とした。早いもので震災からもう20年だ。大きな被害を受けた街は震災後の再開により高層ビルが並んでいる。けれども、震災の記憶は消すことは難しい。昨年1月17日5時46分に行われた追悼式典で、隣にいた人が突然泣き崩れた。何年たっても、取り返せないもの、忘れられないものはあ

『阪神・淡路大震災から学ぶ防災論』



阪本真由美氏
(名古屋大学減災連携研究センター特任准教授)